様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２１３７

研究課題名（和文）「農業・牧畜境界地帯」から構築する新しいユーラシア史像の試み

研究課題名（英文）A Study of New History of Eurasia

研究代表者
森部　豊（MORIBE, YUTAKA）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：００４１１４８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，東ユーラシア世界で見られる草原世界と農耕世界との境界域，すなわち「農業・牧畜境界地帯」の歴史的性格・特質が，ユーラシア全域で普遍的に見られるかを検証し，将来的に，ユーラシア史の歴史像を書き換えるための準備作業を行った。その結果，「農業・牧畜境界地帯」という概念は，ユーラシア史を叙述する上では再定義する必要があるという結論に達した。

研究成果の概要（英文）：This study was verified that the historical character and nature of the boundary area of the grassland world and farming world in the east Eurasian , that is called "agricultural and pastoral boundary zone", were universally seen in Eurasia. And the future, it was carried out preparatory work for rewriting the history image of the Eurasian history. As a result, we concluded that the concept of "agricultural and pastoral boundary zone" needs to be re-defined in order to delineate the Eurasian history.

研究分野：東ユーラシア史

キーワード：農業・牧畜境界地帯

１．研究開始当初の背景

近年，ユーラシア東半部の歴史的展開において，その原動力となった政治権力・軍事力の供給地帯として再注目を浴びつつあるのが「農業・牧畜境界地帯」である。「農業・牧畜境界地帯」とは，具体的には農耕世界（中国本土）と草原世界（モンゴリア・マンチュリア）の間にベルト状に東西に延びる地帯を指すが，歴史研究においては，農耕世界と草原世界の二項対立という観念を見直すために提唱されてきた歴史概念でもある。東ユーラシアでは，特に 3 世紀から 10 世紀にかけては，このベルト地帯に騎馬遊牧民が移住し，それを農耕世界あるいは草原世界の支配者層が軍事力として利用し，あるいは「農業・牧畜境界地帯」に居た騎馬遊牧民が独立して東ユーラシアの覇者となる事例も確認できる。ただし，このような構造がユーラシア全域に貫いているのかは，まだ検証されていなかった。

２．研究の目的

本研究は，このような「農業・牧畜境界地帯」に着目し，3 世紀から 19 世紀までの「農業・牧畜境界地帯」の歴史的性格・特質を明らかにしつつ，それがパミール以西のユーラシア西半部においても同様に見られる現象であるのかを検証する。その検証を踏まえ，ユーラシアの歴史像を，農耕文明圏と遊牧文明圏およびその間を東西にのびる帯状の境界地帯という三種の空間関係から再構築することを試みるものである。本研究でいう「農業・牧畜境界地帯」は，中国から東ヨーロッパにいたる帯状の空間と仮に設定し，ユーラシア全域を考察対象とする。

３．研究の方法

本研究目的の遂行のため，6 世紀から 10 世紀までの東ユーラシア（北中国およびモンゴリア・マンチュリア）史を専攻する森部を中心にし，ハンガリー史の山本明代，清代中央アジア史の小沼孝博，ロシア中世史の宮野裕，モンゴル帝国史の舩田善之の各氏を連携研究者に加え，各時代・各地域における「農業・牧畜境界地帯」の在り方，またこのような概念を利用した歴史像の構築が可能であるかの検証をおこなった。研究スタッフ各人は，個々に先行研究の整理と関連史料・文献の収集を行い，その結果を研究会とメールを利用して相互に情報を交換し，あるいは直接の討論を行う。また，海外調査を行い，具体的事例を実見して検証することにした。

平成 24 年度は「農業・牧畜境界地帯」に関する先行研究の整理と，共同研究員相互の理解の共有，パミール以西での当該概念の存在および有効性を検証するため，研究集会を開催し，個人発表と総討論を行った。また，モンゴル国において，定住民の活動拠点として草原上に建設された都市遺跡の現地調査をおこなった。これは，近年，遊牧民の南下による中国史の変動については多くの成果を得ているが，定住民の北上による遊牧国家の展開については，必ずしも十分に議論されていないからである。また，連携研究者の宮野はロシア南部の草原調査を行い，ロシア帝国における定住民と遊牧民の関係について考察を加えた。

25 年度は，24 年度の現地調査に基づき，遊牧民と定住民の相関関係，特に草原地帯における城郭都市の建設と定住民の経済活動（農業・交易）について，検証することを課題とした。また，資料収集・調査の対象をユーラシア西半部のロシア・ハンガリーへ移した。この地域の専門家である連携研究者の山本の助言と協力を得て，東ヨーロッパにおける遊牧文明と農耕文明の接触・対立・融合の様を明らかにしつつ，このような異質な両文明間に位置した空間の検証を行った。

最終年度の平成 26 年度は，イランにおけるモンゴル帝国に関する調査を行い，当該地域における遊牧文明と農耕文明の接触・対立・融合の諸相を検証した。

４．研究成果

まず，本研究のキーワードとなる「農業・牧畜境界地帯」という概念・設定が，ユーラシア史全域の理解や，当該地域の歴史的把握を上するで有効なものであるかどいう根本的なことから，本研究で得られた結論を述べたい。

本研究に参加した 5 名の研究者のうち，森部およびモンゴル帝国史を専攻する舩田と中央アジア近世・近代史を専門とする小沼は，この概念が有効なものであるという見通しを提言した。モンゴル帝国時代（13～14 世紀）を例にとると，この時代の「農業・牧畜境界地帯」のうち，中国華北地域における投下領（テムジン（チンギス・カン）の一族・姻戚・功臣に分与された住民が居住する地域）に居住していたモンゴル系諸集団の動向は，当該地域への影響が極めて大きいことが判明する。すなわち，モンゴル帝国統治下の華北地域社会では，モンゴル王侯が，職能集団など人員の徴発，宗教的な聖地の保護，宗教事業の促進などを通じて，華北地域社会に大きな影響力を行使しており，また，華北地域の統治者がジュシェン（大金）からモンゴル帝国へと変わる政治・社会の混乱期に，モンゴル王侯の影響の下で，モンゴル統治層，地方官，道士，村民によって地域社会が再構築されていた。また，モンゴル王侯による「農業・牧畜境界地帯」からの人員徴発がモンゴル帝国の絶え間ない拡大を支えていたことも事実である。一方，「農業・牧畜境界地帯」の典型的地域の一つである関中に居住ないし移住した漢人たちは，近年の考古学的発見の研究成果を利用し考察すると，モンゴル化していたことを指摘できる。そして，このモンゴル化した漢人が，カーンのケシクの一員となってその側近として侍し，中央政府の要人と

なり，あるいはモンゴルの騎馬軍団の戦士となり，また関中の安西王府に仕え，モンゴル色濃い雰囲気の中で，その任務に従事し，生活していたのだ。このモンゴル化現象は，いわば，彼らが帝国の統治層の仲間入りをする，あるいは帝国の統治層に仕える過程においてある意味自然な流れでもあった。この意味で，モンゴル時代は，「農業・牧畜境界地帯」の漢人社会に大きな変容をもたらしたと評価できる。

このような東ユーラシアにおける具体的研究と比較するためにおこなったハンガリー平原の調査をおこなった。その結果，ホルトバージの草原地帯の景観が，中央ユーラシアの騎馬遊牧民西進の起点となる放牧地帯であることを確認し，また，バト率いるモンゴル軍がベーラ四世率いるハンガリー軍を大敗させたモヒの付近は，サヨ川・ヘルナード川などの合流地点一帯に平原が広がっており，一定規模の騎馬軍団が進行・駐屯できる戦略的拠点だったことが理解できた。また，モンゴルの侵攻を受けて築かれた要塞・エゲル・ヴィシェグラードの城塞は，同時代の東ユーラシアでも「農業・牧畜境界地帯」の南側に位置する四川地域で類例が多く見られる。モンゴル帝国の「農業・牧畜境界地帯」さらには農業地帯への軍事拡大の影響をユーラシア史規模で捉える一つの着想も得ることができた。

中央アジアにおける「農業・牧畜境界地帯」を，17-18 世紀に成立した遊牧国家ジューンガルの時代のイリの地域像に例をとり，考察してみた。ジューンガルが，1680 年以降にオアシス都市を征服すると，強制的・自発的移住によってイリ地域における定住民人口が増加し，城郭都市・農耕地の成立，交易の活性化という現象が生じた。天山山脈一帯における遊牧民と定住民が交錯する地域の歴史像として，中央アジア史の一つの基軸であった遊牧民と定住農耕民の対立・共生関係は，日常的なレベルでは継続するものの，政治的関係の重要性は清朝のジューンガル征服を経て著しく後退するという姿を提示することができる。翻って清朝の視点から見た場合，これは「農業・牧畜境界地帯」をおさえることが中国本土を基盤とした王朝の繁栄を左右するという見解が妥当であることの例証と見なしえるのである。

一報，これと反するような見方が，ロシア中世史を専門とする宮野から提言された。宮野は，まず「農牧・牧畜境界地帯」に対し，疑問を提示し定義を再検証し，次のように述べている。

宮野は，「「農業＝遊牧境界地帯論」のロシアへの適用可能性を検討するには，この「地帯」の定義の確認が必要」と述べた後，彼自身のこの概念の印象を「農業世界と遊牧世界との間に両者の併存を可能にする地域がある，という考えそのものは容易に理解できるのだが，「境界地帯」という一定の特徴を有する，また幅を持つ地域となると，その内容は具体的にイメージしにくい」と言い，さらに「農業と遊牧との境界は明快な境界線や帯というよりも，実在はしない仮の線を境に，徐々に，グラデーションのある形で遊牧優位地域が農業優位地域に，また逆に農業優位地域が遊牧優位地域に変わっていくものの方が実態に近い」のではないかと述べる。そして，本研究が提言した「農業・牧畜境界地帯」に対し，「長城地帯のごとく，帯状に広く農業と遊牧が併存している地域はその（宮野のイメージする「農業・牧畜境界地帯」の＝森部注）一バリエーションに過ぎないのではないか。東ユーラシア型を標準型と定めると，農業世界と遊牧世界との接点を探る興味深い議論の，世界史における適用可能性が狭まるのではなかろうか」という極めて重要な意見を述べている。その上で，宮野は，彼自身による「農業・牧畜境界地帯」の再定義を「この地帯は基本的にステップ地帯だが，そこには都市や農業が可能な地域が点在するような地帯である。また遊牧民は都市や農業中心地域そのものには入り込まず，その隣接のステップで長期的に滞留可能だった。また，この境界地帯を挟んで農業世界と遊牧世界の中心地が相対し，その結果，この間の地帯において交易が行われ」る空間であるとした。

このような定義をしたうえでロシア中世の状況について考えると，「「黒海北岸」の拠点地の北側が特に検証すべき「地帯」導入候補地だが，（宮野の）管見の限り，この地には軍事戦略上の短期の滞留を除けば，遊牧民の滞留と呼べる事例は知られていない」という。これは，妹尾達彦が仮説的に提示している，ユーラシア大陸を東西に走る「農業＝遊牧境界地帯」論に対するロシア研究者からの批判である。さらに「「境界地帯論」には，実態論と可能性論の混同がみられる。例えば，妹尾は，ロシア方面の「境界地帯」は，農業と遊牧の両方が「可能」であるような地帯として仮説にて提示されている。しかし，歴史的実態として，境界「地帯」は存在しなかった。この地への遊牧民の滞留はなかった。つまり妹尾の言う「境界地帯」の線のロシア部分は仮説であること，農業と遊牧の文化にいくら挟まれようとも，そのこと自体は境界「地帯」の存在を意味しないことに注意せねばなるまい」と指摘する。ただ，「上記定義に当てはまる地域は，帯を作らない形で点在する。こうした拠点は，「境界地帯論」が世界史における遊牧世界の存在を強調（是正）し，大ストーリーに主たる関心を向けているからか，さほど注目されていないように思う。例えば，ユーラシアの，とりわけ大河周辺・流域地域は水に恵まれ，ある程度の農業も，またその近隣では遊牧も可能である」「農業＝遊牧民が共存出来た地域を境界「地帯」上のものばかりでなく，そこに含まれないものまで緻密に追っていく研究を，農業と遊牧の世界を結ぶ接点を探るという意味で非常に

有意義なものと考える。しかし，中央ユーラシア地域の，農業地域に対する「対等性」を強調する目的ありきで境界「地帯」を設定しようとし，結果として境界「地帯」に含まれない地域，事例に関心が集まらないのであれば，この議論には，心情的には同意できても，学問的にはある種の偏りを感じざるを得なくされるだろう」とのべ，「農業＝遊牧境界地帯」論の批判的継承を提示した。

このような基本的見解を踏まえ，中世ロシアと遊牧民との間に「農業＝牧畜境界地帯」は存在するのかについて，以下のような構想を提示した。すなわち，「中世のロシア史においては，遊牧民はキリスト教の神を信じない異教徒として，マイナスのイメージで語られ，また敵対的存在としても語られてきた。しかし，現代においては，そうしたイメージは相当に取り払われている。例えば，ルーシ（ロシアの古名）人は， 13 世紀（モンゴルの到来）から 15 世紀末（モンゴルがモスクワの支配から一応手を引いた時期）までの間，モンゴルを劣った存在とは考えなかった。カラコルムの大カアンやサライのジョチ・ウルスのハンは「ツァーリ」と呼ばれ，キリスト教の父なる神，ローマ，ビザンツ皇帝と同じ単語で呼ばれた。またこの時期には農業地帯の権力と遊牧民権力との権力関係のベクトルの向きが逆であった」ことを指摘する。そして，具体的に，中世ロシアとその南部のステップ草原地帯にいた遊牧系諸族との関係について，次のような考察をしている。すなわち，「キエフ時代のルーシはその南にステップ地帯を抱えており，年代記においてペチェネグ，トルキ，ポロヴェツ（クマン）人，そしてモンゴル人が，通常は敵対的勢力として登場する。しかし，遊牧系諸族はたびたびルーシに侵攻するが，その地の維持を目論まなかった。「森林地域の町々と農地を大草原帝国に決して組み入れようとしなかった」のである。モンゴル帝国（そしてジョチ・ウルス）も間接統治によってロシア地域を支配した」と。そして，「遊牧民がその生活様式を変えないのであれば，森林地域も多いロシアに長期滞在・駐屯することは困難だった」という見解を提示する。

宮野の結論をまとめると，妹尾の言うような「境界地帯論」はルーシには当てはまらないということである。ただし，近代に向かうにつれ，ステップ地域にロシア人が進出できるようになり，遊牧民との距離が近づくことでむしろ適用できるようになるのかも知れないという可能性は否定していない。その一方で，上述の通り，この「境界地帯論」が真に世界史上における農業世界と遊牧世界との結びつきを明らかにするという目的を有するのであれば，都市や農業地域に遊牧民が滞留できるという，やや厳格に思える交流の痕跡のみにこだわることなく，もっと広い，様々な形での交わりをとらえるべきではないかという見通しを指摘した。そのために，宮野は，「境界地帯」ではなく「境界線」で農業世界と遊牧世界を区切るべきではないか，という考えを提示している。そうすれば，滞留地帯を含まないロシア地域における農業世界と遊牧世界との交わりも議論の場にのせることができ，そのことで，文化交流の研究にとっても，また遊牧民の世界史的意義の確認にとっても有意義な実りが得られるように思われるというのである。

ただ，東ユーラシア地域，特に唐代史研究者から提言されてきた「農業・牧畜境界地帯」論は，農耕世界と草原世界という二項対立の図式で描かれてきた「東洋史（特に戦前の中国史）」を見直すという意味を含めたものである。ロシア史研究者やハンガリー史研究者からは，このような見方が成立しにくいという指摘を受けたことで，新たに「境界地帯」の定義をし直し，ユーラシア史の再構築を目指すことが必要であり，かつ可能であることを成果として得られた。

参考文献

①妹尾達彦「北京の小さな橋」関根康正編『ストリートの人類学』下巻，2008 年

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①森部　豊，「ソグド人と東ユーラシアの文化交渉—ソグド人の東方活動史研究序説」，『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』，勉誠出版,査読無，2014，4-14

②森部　豊「八世紀半ば～10 世紀の北中国政治史とソグド人」『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』，勉誠出版,査読無, 2014, 174-197

③森部　豊・齊藤茂雄，「舎利石鐵墓誌の研究」，『関西大学東西学術研究所紀要』46，査読無，2013，1-20

④森部　豊「安史の乱におけるテュルク・イラン系軍人」，『中央아시아研究』17 巻 1 号，査読無，2012，1-26

〔学会発表〕（計 5 件）

①森部　豊，李丹婕著「唐代中国的族群与政治 ——三部著作的評価与反思」をめぐって—農牧接壌地帯と東ユーラシア史—，第 52 回中央アジア学フォーラム，2014 年 12 月 13 日，大阪大学（大阪府）

②森部　豊，河北定州発現宋代石函初釈—兼論五代宋初華北的吐谷渾与粟特人，第二届絲綢之路国際学術研討会　粟特人在中国：考古発現与出土文献的新印証, 2014 年 8 月 14 日，銀川市（中華人民共和国）

③森部　豊，8～10 世紀の中国諸王朝におけるソグド武人の系譜と活動，「中国古代の軍事と民族－多民族社会の軍事統治－」（科研・基盤研究（B）：代表；宮宅潔）研究集会，2014 年 8 月 2 日, 京都大学人文科学研究所（京都府）

④森部　豊，河朔三鎮研究の回顧と展望，2014 年度東西学術研究所第 2 回研究例会，2014 年 6 月 21 日，関西大学東西学術研究所（大阪府）
⑤森部　豊，石刻史料とソグド人研究—「六州胡」とソグド系突厥を例として—，2013 年度東西学術研究所第 10 回研究例会，2013 年 12 月 14 日，関西大学東西学術研究所（大阪府）

〔図書〕（計 2　件）
①森部　豊 他，勉誠出版，ソグド人と東ユーラシアの文化交渉,2014，275
②森部　豊，山川出版社，安禄山—「安史の乱」を起こしたソグド人，2013，98

６．研究組織
(1)研究代表者
森部　豊（MORIBE, Yutaka）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00411489

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
山本　明代（YAMAMOTO, Akiyo）
名古屋市立大学・人間文化研究科・教授
研究者番号：　70363950

小沼　孝博（ONUMA, Takahiro）
東北学院大学・文学部・准教授
研究者番号：30509378

宮野　裕（MIYANO, Yutaka）
岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授
研究者番号：50312327

舩田　善之（FUNADA, Yoshiyuki）
九州大学・人文科学研究科・講師
研究者番号：50404041